

東京 キリシタン屋敷の遺跡

MIYANAGA, Takashi / 宮永, 孝

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

社会志林

(巻 / Volume)

60

(号 / Number)

1

(開始ページ / Start Page)

98

(終了ページ / End Page)

69

(発行年 / Year)

2013-07

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00021156>

東京 キリシタン屋敷の遺跡

宮 永 孝

はじめに

- 一 キリシタン屋敷の跡地
 - 一 山屋敷（キリシタン屋敷）の構造について
 - 一 同屋敷に収監されたキリシタン
 - 一 キリシタン屋敷の終えんと遺物
 - 一 キリシタン屋敷に関する研究小史——明治から今日まで
- あとがき

はじめに

江戸時代は、徳川家康が江戸において幕府を開いた慶長八年（一六〇三）から徳川慶喜が慶応三年（一八六七）大政奉還するまでの約二六〇年ほどをいう。そして武家政治がおわると、天皇政治がはじまり、大東亜（太平洋）戦争終結をさかいにこんどは民主政治の時代を迎え、いまに至っているが、明治維新からこんにちまで一四〇余年にもなる。

江戸時代にはじまり、明治・大正・昭和・平成といった長い時の経過のなかで、都内の遺蹟や古址（古跡）は、ほとんどあとかたもなく地上から消えてしまい、昔日を彷彿させる一物をとどめていない。いまに残る都内の数すくない史蹟も早晚湮滅（いんめつ）することであろう。幽居（いんこ）のなかで古人とともに生き、語らうには、古書をひもどくのがいちばんである。筆者の雑書のなかには、江戸中期に小石川小日向（こびな）にあったキリシタン屋敷に関する



キリシタン坂の頂上より、小石川台方面を撮ったもの。

る和書が何冊があるが、それらを購入したのは、他日この屋敷に監禁された宣教師や信者らについて何かを書く意図があったからであろう。筆者はこのあいだから、それらの本を拾いよみし、本務の余暇にいろいろ関連文献をあつめた結果、駄文ぐらいなら書けそうな気がした。が、新説を打ち立てるまでに至っていない。

*

一 キリシタン屋敷の跡地

キリシタン屋敷の跡地を検証するために茗荷谷^{みょうがだに}にたびたび出かけたが、そこに見たものは、若干の石碑と案内板、何本かの大きなケヤキの樹と静かな住宅地だけであった。むかしキリシタン屋敷の門があったあたりの家（現・小日向一丁目十六番地）の壁面（道路ぞい）に、

「都旧跡^{ときゅうせき} 切支丹屋敷跡」

といった石碑と、もう一つ正方形の小さな石製の碑のようなものがあるだけである。

キリシタン屋敷は、いまではすっかり昔のおもかげを失い、遺構の位置をたしかめることすらむずかしくなっている。その屋敷の位置は、昭和三十年代の町名でいえば、

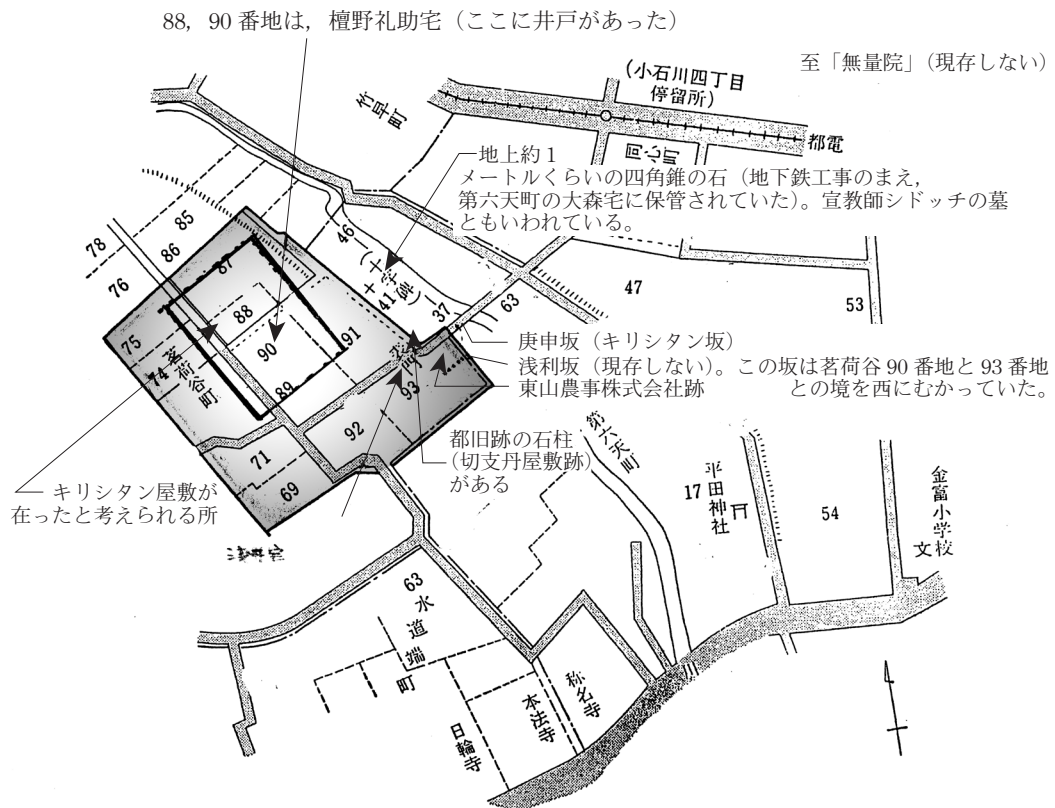
茗荷谷町七六、八七ないし九三番地

付近であるようだ（『文京区志』昭和31・3、八二九頁）。



キリシタン坂を昇って右側に折れた所に「都旧跡 切支丹屋敷跡」の石柱がある。〔筆者撮影〕

キリシタン屋敷区画図



注・『文京区史 巻2』（昭和43・3刊，p.406）を参照し、筆者が手を加えたもの。



宝永5年〔1708〕の「江戸案内巡見図鑑」にみられるキリシタン屋敷。〔国立公文書館蔵〕

キリシタン屋敷は、幕府の大目付・井上築後守政重（宗門奉行を兼務）の下屋敷であったが、宣教師らを監禁するために約七千七百坪ほどの土地に、正保三年（一六四六）⁽¹⁾ 囲い屋敷（約六百から八百坪）を造ったのがはじまりであり、寛政四年（一七九二）⁽²⁾ 廃獄になった。

キリシタン屋敷の名称もいろいろあり、古来もっとも広く用いられたのは、

山屋敷……………〔査祇余録〕（キリシタン屋敷に勤務していた与力・河原甚五兵衛の日記「一六七二〜一六九二」）⁽³⁾

切支丹屋敷……………同右。

キリシタンヤシキ……………〔分間江戸大絵図〕明和元年「一六六三」

切支丹の牢……………『江戸雀』延宝五年「一六七七」

キリシタンヤシキ……………〔江戸大絵図〕元禄六年「一六九三」

切死丹籠屋敷……………「宝永五年江戸案内巡見図鑑」〔一七〇八〕
改 屋敷……………「新井白石日記」宝永六年〔一七〇九〕
キリシタンロウヤシキ……………「分間江戸大絵図」享保四年〔一七一九〕
キリシタンロウヤシキ……………「寛延江戸絵図」寛延二年〔一七四五〕
切支丹御用屋敷跡……………「小日向志」文化八年〔一八一〕
切したん屋敷……………『万世江戸町鑑 上巻』安政四年〔一八五七〕
吉利支丹やしき……………『通航一覽』(巻之百八十九) 嘉永六年〔一八五三〕
切支丹やしき……………『息距編』(五、六巻、水戸藩が編んだ排耶論集。刊行されなかった)

などである。またキリシタン屋敷研究家にとって欠くことができないのは、同屋敷の形状をしめす絵図である。紙上に現われ、世間に知られたものとしては、つぎのようなものがある。

- (1) 中山興「東京小日向切支丹坂の名義」中にみられる絵図。「第二……………『東洋学芸雑誌』(第八三号所収、明治21・8)
図」とあるものが、それである。執筆者である中山興は、天保年間の生まれ。幕府の学問所で学んだ幕臣。維新後、カトリック信徒となり、工部省の電信寮に移めた。築地教会に出入りした。生没年不詳。
 - (2) 「切支丹屋敷」(通航一覽小日向志所載の図を模写したもの)……………渡辺修二郎著『内政外教衝突史』(民友社、明治29・8)
 - (3) 「江戸切支丹屋敷の図」(通航一覽より模写したもの)……………山本秀煌著『江戸切支丹屋敷の史蹟』(イデア書院、大正13・6)
 - (4) 工藤応之「切支丹屋敷」(中山論文に見られるものと同じ図)……………『武蔵野』(第八巻第七号所収、大正15・12)
 - (5) 無題であるが、かりに「切支丹山屋敷図」としておく。これは川……………『東京市史稿 市街篇 第六』(東京市役所、昭和4・1)
- 村恒喜の『史蹟切支丹屋敷研究』の中で用いられたものと同じである。

- (6) 「切支丹山屋敷図」(小日向志所載)……………川村恒喜著『史蹟切支丹屋敷研究』(郷土研究社、昭和5・11)
 - (7) 「中山興作図・切支丹屋敷」……………真山青果
隨筆選集『切支丹屋敷研究・川柳雜記』(大日本雄弁會講談社、昭和27・12)
 - (8) 「切支丹山屋敷図」(三井文庫所藏)……………『史学 特輯サビエル研究』(三田史学会、昭和24・6)
 - (9) 「三井文庫に残る切支丹屋敷絵図」(窪田本に用いられている写)……………窪田明治著『切支丹屋敷物語』(雄山閣出版株式会社、昭和45・9)
- 真の状態はあまりよくない)

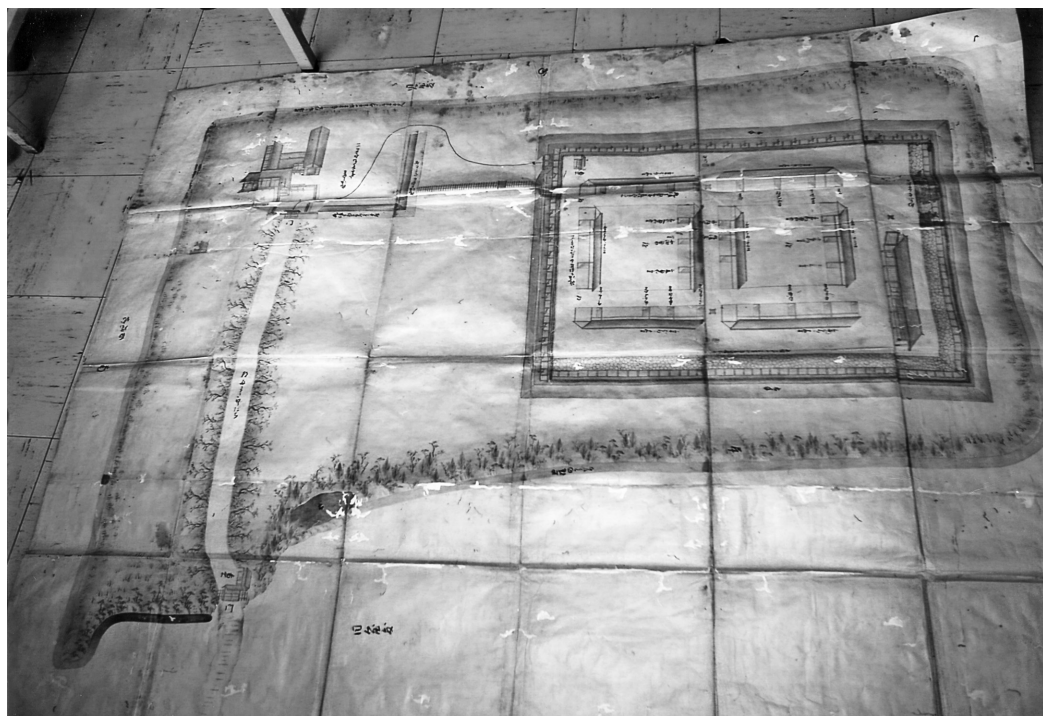
キリシタン屋敷の図としては、これまで「小日向志」(廃獄になった寛政四年「一七九二」から三十余年後の著述)所載のものしか知られていなかった。が、これらの絵図の中でもまれに見る珍品は、公益財団法人「三井文庫」(東京都中野区上高田五―一六―一)が所蔵する「切支丹山屋敷図」である。幸い筆者は先ごろこの絵図を実見する機会にめぐまれたので、その印象を語っておこう。図面は「無題」であって、大きな茶封筒のなかに収められている。

この絵図の大きさは、三井文庫前館長・中井信彦(一九一六―一九九〇、慶大教授)が執筆した「切支丹山屋敷について(口絵解説)」(『史学 特輯 サビエル研究』三田史学会、昭和24・6)によると、

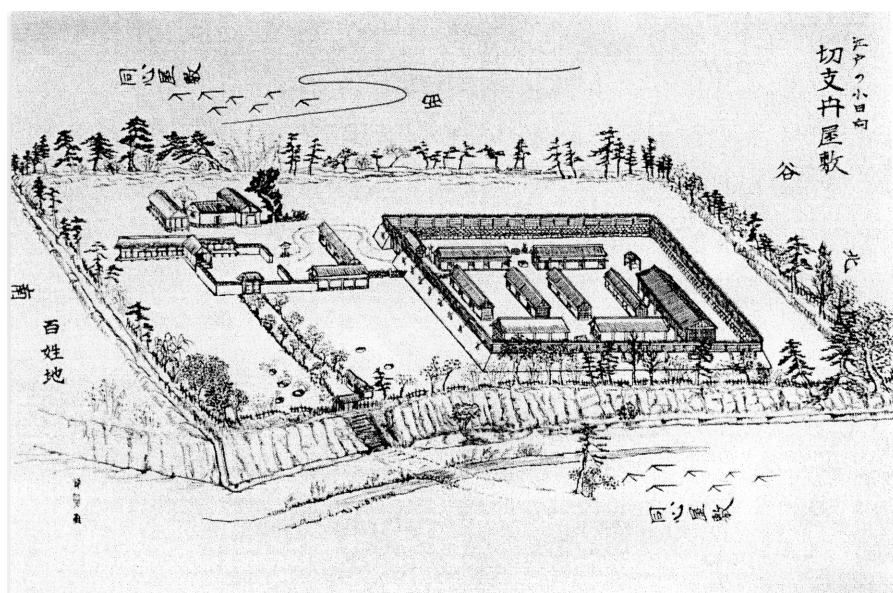
縦一八〇センチ 横一四〇・七センチ

である。料紙(用紙)は、厚手の鳥の子紙(雁皮と楮をまぜてすいた和紙)――縦九一・四センチ、横三五・八センチ――のものを八枚貼りついである。保存状態は、けっして悪くはないが、ところどころに虫くいがあり、裏打ち(他の紙を張って補強されている)が施されている。

絵図には彩色が施されているが、すこし色あせてみえる。建物はうす茶色に、山屋敷を取りかこんでいるのは松の木がある雑木林である。それらは緑色に塗ってある。山屋敷ぜんたいは“空堀”(水のない堀)がめぐらされているが、敷地の東南の一角に、“池”または“沼”のようなものがみられる。山屋敷の総面積については何も記されていないが、その周囲は三百三十間というから、約六〇〇から八〇〇坪⁽⁵⁾ほどの広さであったと考えられている。



「切支丹山屋敷図」〔三井文庫蔵〕〔筆者撮影〕



サンタマリア教会のマリア・マレガ神父が、苦心のすえ完成したキリシタン屋敷の復元図。
〔三井文庫蔵〕

この絵図の伝来は、不明である。もと京都府庁の反古のなかにあったのが、昭和六年（一九三二）に東京の某書肆が購入したものであり、それをまた買い入れたのが三井高堅（源右衛門、一八六七～一九四五、実業家・拓本収集家。三井新町家第九代当主、三井銀行社長、三井呉服店社長）であった。本図の下部——左右に、「讀易堂圖書記」と「三井家」の印が見られる。

本絵図の作製年代も明らかでない。それについて何らの記載もないし、作者名も記されていない。「査妖余録」（宗文改与力河原甚五郎の記録。寛文十二年「一六七二」～延宝元年「一六七三」、延宝二年「一六七四」一月～元禄四年「一六九二」などの記事を取めたもの）には、五名の収容者（三右衛門、卜意、壽庵、南甫、二官）の名が記されているが、本絵図には他に十名（四郎右衛門、元交、舟泊、了味、道巴、長兵衛、りうしん、甚太郎、壽慶、九郎兵衛）らの名前がみられるから、この絵図は「査妖余録」の筆録がはじまった寛文十二年（一六七二）以前よりもさらに古い、万治元年（一六五八）以前と推定されている。ちなみに井上筑後守が職を辞したのは万治三年（一六六〇）七月九日である。

*

一 山屋敷（キリシタン屋敷）の構造について

キリシタン屋敷は、長方形をなしており、南北に長く、東西に短い。この屋敷の周囲に三百三十間（約五九四メートル）の空堀がめぐらしてあった。堀の幅は一間（約一・八メートル）、深さは一間一尺（約二メートル余）ほどであった。

屋敷の外側——北方に「谷」があり、南方は「百姓地」、東と西とに「同心屋敷」があった。

東方に屋根のついた表門があり、その前に石段があった。その手前にあるのは、「庚申橋」（またの名は「獄門橋」）である。表門をくぐって右側にあったのは、番所である。番所の前に「からたちばな」（やぶこうじ科の常緑小低木）が植えてある道が、西の方向にまっすぐ伸びている。行き着いた先にふたたび屋根のついた門がある。それは井上筑後守の屋敷にいたる門である。

囚人はこの門をくぐったのち、右（北の方向）に曲がり、「囲い屋敷」（牢獄）にむかった。それは土手をめぐらしてあり、土手の上には屋根のついた塀（高さ一丈二尺〓約三メートル六〇センチ）としのびがえしとして八寸（約二六センチ）釘が打ちつけてあった。

この囲い地の大きさは——

東西三十三間（約五二メートル）

南北四十六間（約八三メートル）

ほどである。牢屋（ひのきの板で造ったもの、外観は土蔵）は、中庭に四棟あった。独房の数は七つ以上あった。一棟に三部屋あり、むねの大きさは十二間（役二十三メートル）であった。

ほかに井上筑後守の家来や足輕たちのための住居が、四棟あった。

「通航一覧」にある絵図によると、そのほか吟味所・井戸・官庫（没収した祭器、式具、書物、関係帳簿などを収めた）・墓（死亡した宣教師やしもべのもの）などがあったようである。

キリシタン屋敷は、棄教した宣教師らを収容した所であり、それが存続したのは百四十年ほどであるが、廃獄になってからは、山屋敷はじょじょに武家屋敷として分割されて行った。

*

一 同屋敷に収監されたキリシタン

徳川秀忠（一五七九～一六三二）の代に入ると、家康の志をつぎ禁教政策がいつそう強化され、長崎市民に『転び証文』（棄教証書）を出させたり、一般人には所属する寺院を定め『宗旨帳』を設けた。また棄教した司祭（^{パドレ}）をキリシタンの目明し（探偵）として使った。

寛永十年九月（一六三三・一〇）、ポルトガル人イエズス会司祭クリストヴァン・ヘレイラ（一五八〇？～一六五〇？）は、長崎潜伏中に捕えられ、穴吊しの拷問にあい棄教し、のち沢野忠庵（^{ちゅうあん}）と称して長崎にとどまり、幕府宗門目明し兼通訳となった。同十九年七月（一六四二・八）、司祭アントニオ・ルビノ一行九名は、マニラから薩摩に着いたが捕えられ、長崎に送られ、取調べの上、翌年二月処刑された。

三代将軍徳川家光（一六〇四～五一）は、当初なるべく、キリシタンを殺さず、その宗旨を改めさせる政略（⁶）をとっていたが、寛永十四年（一六三七）の島原の乱が起ってから、その処置を改め、キリシタンを刑戮（^{けいりく}）する（殺す）方針に変わった。しかし、天草の乱がおわり幕府の施策がようやく緒につくや、キリシタンにたいする扱いにも変化がみられ、殺戮主義から不殺主義方式を取るようになった。

キリシタン屋敷の住人第一号となったのは、つぎに述べるキリシタン十名であり、寛永二十年五月十六日（一六四三・七・一）平戸の北方——梶目^{かじめ}の大島（博多領）の見張番に捕えられ、長崎から江戸に送られ、この一行を収容するために特設された『囲い屋敷』に入れられた。この牢獄に監禁されたのは、つぎの人々である。

「人名」（日本名）

「出自その他」

司祭 ト意^{ぼくい}（七十歳）……………ポルトガル人。ペドロあるいはペロ・マルケス（一五七五―一六五七）。エボラ管区内のモウラン生まれ。イエズス会士。

イルマウン 南甫^{なんぼ}（四十二歳）……………肥前国長崎茂木村の医師であった。いつのころか不明だが、外国に渡り、入信。アレラレヒエラと改名した。

同宿 二官^{じくわん}……………コーチンシナ生まれ。キリシタンの名をトマスといった。⁽⁸⁾

同宿 壽庵（三郎左衛門）「二十歳？」……………広東順徳縣⁽⁹⁾の生まれ。キリシタンの名をジョヴァンニといった。

司祭 岡本三右衛門（四十二歳）……………イタリア人ジウゼッペ・キアラ（一六〇二―一六八五）。シチリア島のパレルモの出身。

四郎右衛門（五十一歳）……………大坂今橋一丁目⁽¹⁰⁾で生れた日本人。マニラに家があり、家族を残して日本に來た。

他に以上六名といっしょに捕縛され、長崎で死亡したり、江戸に連行された者として、つぎの四名がいるが、棄教後の日本名や没年は明らかでない。

司祭 アロンソ・アロヨ（五十一歳）……………アラゴン生れのスペイン人。マニラ管区長の秘書として來日し、棄教。のちキリス

ト教に復し、餓死した。

イルマウン ロウレンソ・ピント（三十二歳）……………長崎生れの中国人。父ミゲル・ピントは唐通詞。ロウレンソは中国人の父と日葡混

血の母との間に生れた。両親はマカオ在住。

マタベ・ヤシント（五十五歳）……………京都生れの日本人。

フランシスコ・カッソラ・ロマイン（四十歳）……………ロンバルディア生れのイタリア人。日本で棄教後、ほどなく死亡。

これら十名は、すべてキリスト教徒であり、自由な意志によって日本渡海を実行に移した。ジャンク一隻をまず買い入れた。かれらはコーチンシナとカンボディアとの間にあるプラス島を出帆した。日本に近づき、陸地を発見すると、小型の舟に乗り移り、不毛な小島（無人島）をめざしてこぎだした。が、人間が見つからないので、つぎつぎと小島を転々とした（『オランダ商館長日記 訳文編之七』東京大学史料編纂所、平成3・3）。

しかし、ある島に上陸したとき、山の頂上に番小屋があり、その番人に銀貨二枚をあたえた。やがて一行は下関を目ざして舟をこぎだしたが、番士たちに追跡され、かれらのいた梶目の大嶋に連行され、そこから長崎、江戸へと送られた。

日本渡海から捕縛にいたる経緯について、日本側史料（『通航一覽 卷之百八十八』）につぎのような内容の記事がみられる。

寛永二十年 癸未^{ミヌフトヒツジ}五月十二日（二六四三・六・二七）のこと、筑前国梶目の大島に十人乗組の小舟が着岸した。船中の者たちは上陸すると、水などを飲んでゐた。この島の神主^{かんぬし}・甲斐四郎左衛門の弟・仁兵衛という者が、一行にちかづくと、ここはどこであり、山の上にある小屋は何かとたずねられた。仁兵衛は、あれは邪宗を勧めにやって来る異国船を見張るための番所である、という、皆々おどろき、銀二枚を出し、われわれは船を出して去るから、しばらくだまっていってくれるようにたのんだ。

上陸した者たちは、皆和服を着、腰に脇差（ふつう一尺七、八寸＝約五〇センチ）を差していたことである。とりわけ奇異に感じられたのは、異国人と思われた者が日本人に似せて月代^{さかや}を剃っていたことである。かれらは異教を伝えるために秘かにやって来たことを白状した。

仁兵衛はさっそく家に帰ると、このことを島番の村井仁右衛門に報告した。島奉行の村井は島民たちを集めると、追い風に帆を揚げて逃げてゆく異人たちの船を追跡し、ついに地の島という所で追いつくと、一行十名を召し捕らえることができた。異人たちはひとまず大島に連行された。

南蛮のバテレンらを捕えた、といった報告は、さっそく江戸と長崎へ伝えられた。一行十名は長崎奉行所でたびたび拷問と取調べを受けたのち、

棄教したので江戸送りとなった。江戸に到着したのは寛永二十年七月十三日（一六四三・八・二七）のことであるが、ひとまず伝馬町の牢に入れられたのち、小日向のキリシタン屋敷に監禁された。

宣教師たちは、全員キリスト教を棄て、日本の宗旨になったのであるが、江戸まで同行した蘭通詞・西吉兵衛が後日オランダ商館長に語った話によると、捕縛された者は、これから日本人として生活し、女といっしょに暮らすよう命じられたという。日本人はこれを受け入れたが、四人のポルトガル人宣教師（ペドロ、キアラ「イタリア人」、アロヨ「スペイン人」、ロマイン「イタリア人」らのことか）は拒否したので、以前のようにきびしい監視下にあるという（『オランダ商館日記』一六四三・一二・二付）。

宝永五年八月二十九日（一七〇八・一〇・一二）、大隅国屋久島（現・鹿児島県の南約六〇キロに位置する円形の島）の湯泊村沖に外国船が現れるや、男一人をボートで上陸させたのち退去した。上陸した男は、色白の髪は黒い、身のたけ六尺以上もある大男であり、日本人のようにさかやきをそり、茶褐色の着物をつけ、腰に脇差しを差していた。

折から炭焼き用のまきを伐りに来ていた恋泊（こひどまり）という村の百姓・藤兵衛と出会った。見たところ異国人にしか見えない大男は、水をのみたいしぐさをした。その後島民が三人ほど来たので、藤兵衛はその怪しい男をじぶんの家に案内し、食事などをあたえたと、代金を払おうとした。

その後、この異国人は訴えによってやって来た役人に引渡され、宮ノ浦に留めおかれた。鹿児島から長崎奉行の命をうけた引き取りの役人が屋久島にやって来、異国人を伴って長崎に着いたのは宝永五年一月九日（一七〇八・一二・二〇）であった。

長崎では奉行・別所播磨守、駒木根肥後守らの立ち会いのうえ、出島のオランダ人に通訳と吟味をさせたところ、この異国人は、シチリア島生まれのイタリア人——ジョヴァンニ・バッティスタ・シドッチという名の四十一歳になる司祭であることが判明した。同人はローマ法王（パップ）クレメンス十一世の命をうけて、布教のためにマニラ経由で日本に潜入を図ったのである。

日本語もすこし理解できたようで、蛮語をまじえて語ったというのだが、ローマにいたとき書物から学び、またマニラで日本人に手ほどきを受けたことがわかった。シドッチは横文字の書物を大小十一冊所持していたが、その中には——「ヒイタ・サントールム」（Vita Sanctorum「聖人伝」）と「デキシヨナリヨム」（Diccionarium「辞書」）があったと「西洋紀聞」にあるのは、つぎの書のことである。



「切支丹山屋敷図」にみられる“長助・はる夫婦”の墓の図。

サントスの御作業の内抜書 加津佐のコレジオ刊(天

正十九年「一五九一」)

ディエゴ・コリャド著『日本文典』(Diego Collado: *Ars*

Grammaticae Japonicae Linguae) ローマ刊(寛永七年「一

六三〇」)

シドッチは長崎の牢にあること一年——ついにかれは宝永六年九月二十五日(一六七八・一一・九)牢興(囚人を護送するための乗物)に乗せられ、つごう二十六人の供回りといっしょに長崎を出発し、江戸にむかった。同年十一月一日(一六七八・一二・一四)江戸に到着し、直ちに小日向のキリシタン屋敷の牢に入れられた。

江戸においてシドッチの尋問をおこなったのは、新井白石(一六五七―一七二五、江戸中期の儒学者、政治家。宣教師シドッチの訊問によって成った『西洋紀聞』は有名である)である。かれは翌宝永七年一月二十二日(一七一〇・二・二〇)から同年十二月四日(一七一一年・一一・二二)の間に三たび取り調べをおこなった。

“囲い屋敷”の住人となったシドッチは、召使いをつけられ、与力や同心らの監視のもとに、毎日二汁五菜の食事と金二十両五人扶持供されることになったが、幽閉されて六年目の正徳四年(一七一四)二月、奴婢(下男、下女)として付きられていた長助・はる夫婦にキリスト教を勧めたことが露見したため、同年三月詰牢(ようやく体が入るくらい狭い牢)に移され、同十月二十一日(一七一四・一一・二七)四十七歳で病死した。死因は凍死とも食を絶って死んだともいう(「通航一覧 卷之百九十」)。キリシタン屋敷の構内に、シドッチや長助夫婦が葬られたといった言い伝えがあり、諸家によっていろいろ書かれてきたが、真相は明らかでない。たとえば、つぎのような説がある。

シドッチは、構内の北のほう——裏門から入って右手に埋葬された。墓標として榎(にれ科の落葉高木。高さ一〇メートルほどになる)が

植えられ、小高い土のうえに成長して、『ジョアン榎』と呼ばれていたが、寛政年間に廃獄になったころ、切り払われたという。

長助夫婦は、裏門から入って左手に埋葬されたとある。長助は正徳五年十月七日（一七一五・一一・二）五十五歳で病死したが、妻女のお春の没年は不明である。ともあれ同夫婦は構内に葬られたらしい。埋葬地の盛り土のうえに『木犀』（モクセイ科の常緑高木。秋になると、黄または白の甘いにおいの花が咲く）が植えてあったが、寛政年間シドッチの墓とともに跡が絶えてしまった（工藤応之「切支丹屋敷」『武蔵野』第八巻第七号所収、大正15・12）。

*

一 キリシタン屋敷の終えんと遺物

山屋敷に幽閉されていたキリシタンは、時が経つうちにつぎつぎと獄内で亡くなっていった。キリシタン屋敷内で死亡した者で名がはっきり判っている者は、つぎの六名である。

〔氏名〕

〔死亡年月日〕

ト意ぼくい

明暦三年五月一日（一六五七・六・六）

南甫なんぼ

延宝六年五月十六日（一六七八・七・四）、享年七十九歳。

岡本三右衛門

延享二年七月二十五日（一七四五・八・二四）、享年八十四歳。

壽庵

元禄十年八月（一六九七・九）、享年八十歳。

二官じふん

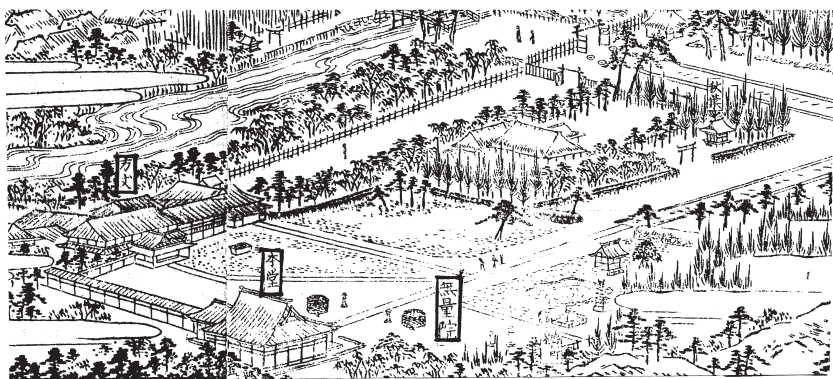
元禄十三年七月十六日（一七〇〇・八・三〇）、享年七十八歳。

ジョヴァンニ・バッティスタ・シドッチ

正徳四年十月二十一日（一七一四・一一・二七）、享年四十七歳。

このうちシドッチを除く、他五名は茶毘に付されたのち、小石川の無量院（浄土宗京都知恩院の末（寺）¹³）薬王山能覚寺と号している。家光の側室お万の方の菩提寺、明治三十年代に廃寺¹⁴に葬られた。

岡本三右衛門ら一行十名のうち、アロンリ・アロヨ、ロウレンソ・ピント、マタベ・ヤシント、フランシスコ・カッソラ・ロマインら四名の没



手前“無量院”の図。

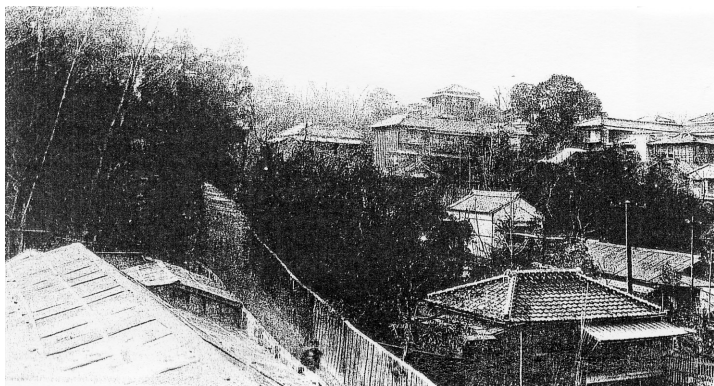
年については不明である。

シドッチの死をもってキリシタン屋敷には、一人のキリシタン教徒もいなくなった。シドッチがまだ生きていた元禄十四年（一七〇一）十二月——キリシタン屋敷の北の部分がいくらか削られ、旗本七家に分割され、“七間屋敷”とよばれた⁽¹⁵⁾。いま（昭和五年当時）の茗荷谷八十七、八番あたりが、その跡地らしい⁽¹⁶⁾。

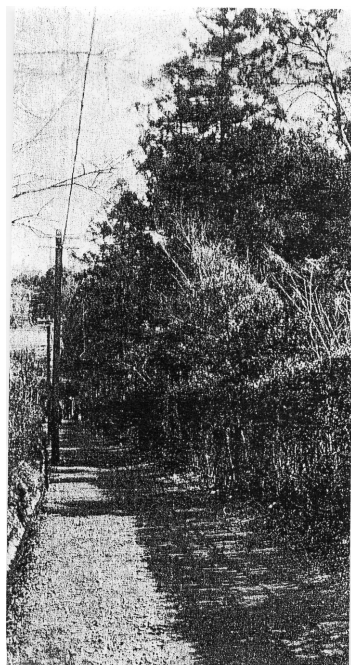
これより二十数年後の享保九年か十年ごろ（一七二四、五年）、キリシタン屋敷は火災により鳥有に帰し、礎石のみを残すだけになった。天明年間（一七八一〜八八）この屋敷の石垣はとりくずされた⁽¹⁷⁾。キリシタンの徒絶えて八十年ほどになった寛政四年（一七九二）キリシタン屋敷は廃され、その跡地の一部は、樹木を切りとり、地ならししたのち、徐々に替地または屋敷として諸家に割渡され、浅野壹岐守の下屋敷となり、ついで大久保志摩守や毛利讃岐守の下屋敷に変わった。他の一部は、宮原長門守の下屋敷、久留源三郎の屋敷、鉄砲のけいこ場に充てられた⁽¹⁸⁾。その後、土地の所有者も変わり明治となった。

キリシタン屋敷跡にかぎらず小石川一帯——とくに小日向第六天町から茗荷谷の清水谷町のあたりは、大正のはじめごろまで、樹木がうっそうとして昼なお暗いところであったという。矢田挿雲（一八八二〜一九六一、大正・昭和期の小説家、「江戸から東京へ」「一九二〇〜二三」を『報知新聞』に連載した）が子供だったころ、小日向の丘陵一帯は樹木が多く「昼なお暗き深山の趣があった」という。だから東京の他の地区より「特異な、神秘、幽うつつの感じをあたえた」と述べている（『切支丹坂由来』）。どちらかといえば、人里はなれた淋しい所であったようである。市内とはいえ、車馬の音も聞こえず、ここの坂、かしこの谷と、うすぐらい木立のかげに大名華族の^{ひかえやしき}控屋敷（本邸のほかに、必要に備えて設けておく屋敷）などもあった。それらの控屋敷は、風雨に黒ずんだ門扉を閉して森閑としていた。

ときどき人通りもまれな坂道のかげから、にわかにベルの音がしたかと思ったら、どこかの屋敷の主人をのせた人力車が音もなく走ってくるの



小日向のキリシタン屋敷址。『歴代文化皇国史大観』(東洋文化協会、昭和9・8)より。



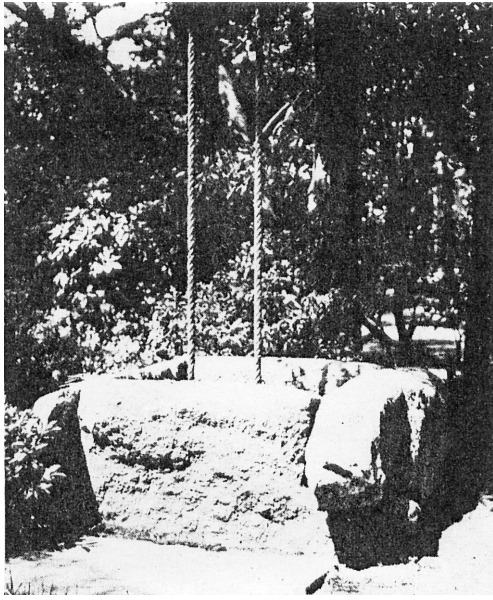
と行きあたることがあった(河野義博「切支丹屋敷跡と朝妻桜——および及、その文献」『書物展望』第八二号所収、昭和13・4)。

こんにちキリシタン屋敷と縁故がある遺物は、ほとんど跡形もないほど消失しているが、大正末から昭和初頭にかけて、まだ相当なものが残っていたようである。大正十五年(一九二六)ごろ、いま「キリシタン坂」と呼ばれているものは、むかし「こうしんざか庚申坂」(キリシタン屋敷の表門に至る坂)といわれていた。この坂の十字路を横切り、西に二十メートルほど行くと、小川があり、そこに「木橋」(庚申橋)が架かっていたという(いまはない)。むかし「獄門橋」と呼ばれたものがそれである。右の獄門橋に近い生垣のあいだに高さ三尺ほどの自然石(伊豆石)が一つみられたという。俗にいう「八兵衛石」である。八兵衛は奥州岩城(岩代の誤りか?現・福島県西部)出身の盗人(歳十九)であった。伝馬町の牢より山屋敷に移されたかれは、延宝七年五月十二日(一六七九・六・二〇)キリシタン屋敷において処刑(試斬)ためしぎりになった。その墓石(はじめ構内にあった)であったという(『改撰江戸志』)。

また檀野礼助氏宅(昭和五年「一九三〇」ごろの番地では、茗荷谷八十八番地)の庭に、

みかげ石の井戸

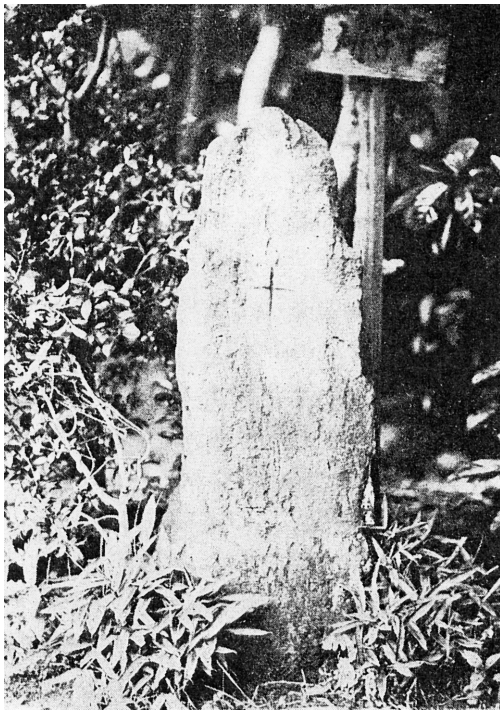
長助夫婦の墓の遺址(奥庭の一部に土をや、盛りあげ、その上に平石を置いたもの)⁽¹⁹⁾



檀野邸内の井戸



八兵衛石 川村恒喜著『史蹟切支丹屋敷研究』（郷土研究社、昭和5・11）より。



十字碑

などがあったほか、寺田香苗氏宅（昭和五年ごろの住所によると、小石川区第六天町四十一番地）の庭に、

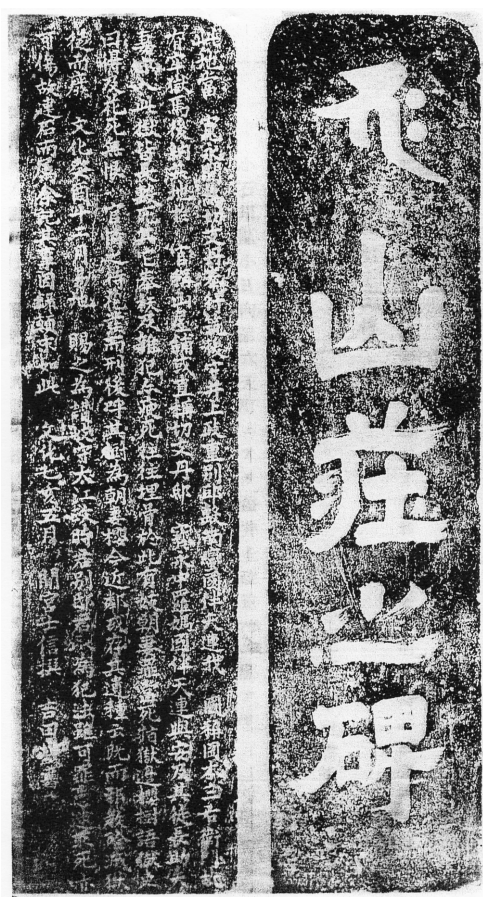
天然石（二尺九寸ほどの石の上部 $\frac{1}{3}$ のところに十を刻んだもの）

があった。この石はキリシタン屋敷の崖下（空地——鉄砲のけいこ場）⁽²⁰⁾において発見されたものという。⁽²¹⁾

キリシタン屋敷の一部は、文化十年十二月（一八一四・一）毛利讃岐守政時（二万石）に下賜され、四年後の文化十四年十



日蓮宗・蓮華寺（中野区大和町）にある「山荘之碑」。
〔筆者撮影〕



「山荘之碑」の拓本 『東京市史稿 市街篇 第6』（東京市役所、昭和4年〔1929〕1月）より。

一月、柳生家（但馬守）と相對替となった。政時はさまさまの罪を犯して当地に葬られた者のことを知っていたので、亡くなった者の死をいたむために、間宮士信（書院番、小姓組番などを勤めたのち、地誌局總裁に進んだ。「小日向志」の著者⁽²²⁾）に撰文を依頼し、

「山荘之碑」（たて二一・九センチ、よこ二八・五センチ、厚さ一七センチ位）

をキリシタン屋敷内に建てた。のちこの碑は、蓮華寺（日蓮宗——小石川関口台町四十八番地）に移され、さらに同寺院の移転にともない、現在のところ——中野区大和町四の三七の一五（高門寺駅より西北約一キロ）に移った。蓮華寺は「赤門の寺」として知られているが、この碑は、門を入ってしばらく歩き、本堂のわきにすえられている。

漢語で「山荘^{さんそう}」といえは、山の中にある別荘（山墅^{しょ}）の意であるが、ここでは「山屋敷」の俗称（正式でない呼び方）として用いたものであろう。いずれにせよ、「山荘之碑」はキリシタン屋敷とかかわりあいがある、いまに残るたしかな遺物の一つである。

キリシタン屋敷の建設は、ジウゼッペ・キアラこと岡本三右衛門ら十名のバテレン（キリシタン）の渡来と収容をもってはじまったといっても過言ではない。

かれは四十余年もの長いあいだキリシタン屋敷で暮らしたが、妻および奴婢をつけられ、毎年銀一貫目十人扶持を下された。⁽²³⁾ 万治元年（一六五八）宗門奉行・井上筑後守は、三右衛門らにキリシタン教義のまやかしについて詰問し、その回答を書付をもって提出させた。井上筑後守の質問の一部は、つぎのようなものであった。

一 デウス（神）は、『光あれ』の一声をもって姿をみせた。キリシタンの宗門によると、デウスは天地の作者であると説き、人が死してのちもデウスをたのみとするのは、はなはだ疑わしい。

一 フランシスコ・ザビエルが日本に渡来し、邪教を広めようとしたが、キリシタンに対する法度（おきて）がきびしいために広まらなかった。もしデウスが天地の創造主であるなら、この国をいかようにもできたのに、じっさいは何もしなかった。デウスは邪教をひろめ、人をまとわしているだけである。

井上筑後守の疑念にたいして、三右衛門は天地創造の話は不確かでいかがわしいこと。キリシタンが拷問をうけているときでも、いっこうに奇蹟が起らないこと。布教は他国を侵略するための手段であること。デウスに敵対する者を殺しても罪にはならぬことなど、要するに「デウスハ大悪人ノ源、世界ノ人間ノ悪成主也」（「契利斯督記」）ときめつけ、キリシタン教義の欺瞞性について上書した。

三右衛門らとはときどきキリシタンの教えや器物について質問をうけ、また延宝二年（一六七四）春には「宗門之書」（キリスト教についての書）を書くように命じられ、年内にそれを完成し、提出した。その功にたいして翌年五月報償金が出た。

岡本三右衛門……………金三兩

壽庵……………金二兩

二官……………金一兩

南甫……………金一兩

〔査祇余録〕

三右衛門は延享二年（一七四五）七月はじめより病にかかり、食欲がなくなったので獄医・石尾道明が薬をあたえたが、薬石効なく、同月二十五日七ツ半時（午後五時）亡くなった。享年八十四歳。キリシタン屋敷で暮らすこと四十三年であった。

翌二十六日、検使（御徒目付、御小人目付ら計六人）が山屋敷を訪れると、時の奉行・林信濃守からの葬式の命をつたえた。小石川無量院から僧玄秀という者がやって来て、遺骸を輿こしにのせると、それを無量院にはこび、のち火葬にふし、これを同院に葬った。法名を「入専浮真信土」とつけ、二十七日の朝、奉行からの申し渡しとして、石碑を建てることになった。墓を建てる件は、壽庵・二官および三右衛門の後家からの願いを容れたものである。

九月二日——蓋石ふたishiの形がまるで“笠”かさ（司祭帽）のような、一風変った墓碑が完成した。三右衛門の所持金は二十八両三分あった（〔査祇余録〕）。後家は月俸八口くちをもらっていたが、元禄八年正月十五日（一六九五・二・二七）七十四歳で没した（小日向志）。葬地についてはつまびらかでない。

三右衛門の墓は、明治四十二年（一九〇九）戸崎町とぎまちの無量院の墓地から雑司ヶ谷墓地の二等地五号十二（住吉茶屋の道路をへだてて前方、十二本目と十三本目のあいだ）に移された。が、墓の台石は、雑司ヶ谷に移動のとき、ぜんぜん別個のものと取換えられてしまったという（川村恒喜著『史蹟切支丹屋敷研究』、五一頁）。

この墓碑は、その後たびたび改葬されるといった数奇な運命をたどり、いまはカトリック調布教会・サレジオ神学院（調布市富士見町三―二―一―一二）の入口ちかくに在る。昭和十八年（一九四三）サレジオ会員タシナリ神父が、雑司ヶ谷墓地でこの墓を発見し、許可をえて練馬サレジオ神学院に移し、同二十五年（一九五〇）いまある調布に移された。また昭和五十八年（一九七七）五月、小石川伝通院の墓地内に供養碑（レプリカ）が建立された。

*

一 キリシタン屋敷に関する研究小史——明治から今日まで



カトリック調布教会・サレジオ神学院にある三右衛門
(ジュゼッペ・キアラ) の墓。〔筆者撮影〕



「雑司ヶ谷墓地」にあった当時の三右衛門
(ジュゼッペ・キアラ) の墓。

キリシタン屋敷が創設されたのは、三代将軍・徳川家光の時代——正保三年（一六四六）のことであり、これが廃獄となったのは、寛政四年（一七九二）十一代将軍・家斉いえなりのときであった。この「囲い屋敷」は百四十六年間存続した。

禁教時代に、宗門改あらための役人をのぞくと、キリシタン屋敷について筆録した者はいなかった。廃獄から幕府体制が崩壊するまでさらに百七十余年の時が経過し、やがて明治時代をむかえる。新時代になってもキリシタン屋敷について考証した日本人はまだいなかったようだ。

しかし、同屋敷にいちはやく着目し、その遺跡と虜囚生活を強いられたバレンたちの痕跡を調査することに手をつけたのは日本人ではなく、外国人であった。キリシタン屋敷研究の第一号の榮譽をになったのは、お雇い外国人のひとりウィリアム・エリオット・グリフィス（一八四三～一九二八、アメリカの教育家。越前福井藩や大学南校で理学・化学などを教えた）であった。

グリフィスは東京にいた明治七年（一八七四）ごろ、異教徒審問所（キリシタン屋敷のこと）の跡と殉教者たちの墓を発見することに努めた（グリフィス著『ミカドの帝国』）。かれは昼なおくらい、うっそうとした森がまだ残っ

ている小日向へ出かけ、竹やぶの中の小径にわけ入ると、窪地（まわりよりくぼんだ所）において、無名の石（八兵衛石）を見つけたが、それをシドッチの墓と誤解した。

二番目にキリシタン屋敷のことを調べたのは、アーネスト・メイスン・サトウ（一八四三～一九二九、イギリスの外交官、当時駐日イギリス公使館付日本語書記官——「二等書記官」）のようである。かれは明治十年（一八七七）十月二十七日（土）——東京大学で開かれた日本アジア協会の例会において、ジョン・H・ガビンズ（一八五二～一九二九、駐日英公使館書記官）の発表のあと、「日本におけるキリシタン伝道衰亡論」と題するものを口頭発表した。

サトウはひじょうに日本語にたん能であったから、日本におけるキリシタン関連の文献にも通じ、すでにキリシタン屋敷の跡地、無量院にある記録や岡本三右衛門の墓などを見ていたようである。しかし外国人研究者の通弊として、誤りや誤解をさけることができなかった。たとえば、キヤラ神父やその他の改宗を強いられたキリシタンの収容された建物は——小石川郊外タチギ畑の左側から西にむかうキリシタン坂の急坂に接した区域にあった、とか、そこは後年、三浦という旗本の家がかった所で、いまは菜園になっている、といったように、多少あいまいな点があることを指摘されている（John H. Gubbins: "Review of the Introduction of Christianity into China and Japan", Transactions of the Asiatic Society of Japan, vol. VI-part. I, Jan. 1878, p. 61～62, 川村恒喜著『史蹟切支丹屋敷研究』郷土研究社、一六頁）。

明治二十一年（一八八八）六月六日——日本アジア協会の例会において、工部大学の英語教師ジェイムズ・メイン・ディクソン（一八五六～一九三三、スコットランド人）は、「キリシタンの谷」というテーマで口頭発表し、翌年『日本アジア協会紀要』（十六巻）にそれを掲載した。当時、ディクソンはキリシタン屋敷跡の近くに住み、毎日「墓標」（じつは八兵衛石）のそばを通らねばならなかった、という。「その墓石は、谷のパードレもしくはキリシタンの一人のものであろう」と記している。かれは「八兵衛石」の写真を論文に添えるとき、「キリシタンの墓」といった説明文をつけている。

明治期において、外国人がキリシタン屋敷跡に関して発表した調査記録のなかで、ディクソン論文は最も珍重すべき資料という（川村前掲書、一七頁）。

大正六年（一九一七）九月ごろ、横浜の山手八十五番に住むカトリック教の司祭フェルジナンド・スペンネルは、キリシタン屋敷跡の研究に着手し、同年十二月二十九日に戸川残花（一八五六～一九二四、明治・大正期の詩人・評論家。雑誌『旧幕府』を刊行）とともに同屋敷跡を訪れ、



正面向って左は、フェルジナンド・スペンネル師。そのとなりは戸川残花。『史蹟名勝天然記念物』(第3巻第1号所収、大正8年〔1919〕1月)。

その内外景を写真に撮ったりしたようだが、その調査結果を発表したかどうか定かでない。

明治期に日本人として初めてキリシタン屋敷跡に関する論文を発表したのは中山興であり、その「東京小日向切支丹坂ノ名義」(『東洋学芸雑誌』第八三号所収、三九八〜四〇六頁、明治21・8)は、キリシタン同心・河原甚五兵衛の覚書と老談一言記などに散見する説を参考にして記したものである。

この中山論文につづいたのは、渡辺修二郎(一八五五〜?)、福山藩士の子に生まれ、東京英語学校や立教大学にまなぶ。仙台中学校、華

族学校「学習院」の英語教師。のち大蔵省御用掛。英公使館のアーネスト・サトウと親交があった)の『内政外教衝突史』(民友社、明治29・8)である。その第二十六章にみられる「切支丹屋敷」同所に執はれし伊太利人」(二七五〜一八〇頁)は、キリシタン獄舎の創設、その位置、ジウゼッペ・キアラやジョヴァンニ・バッティスタ・シドッチなどの日本潜入などについて述べている。しかし、とくに新説はみられない。「切支丹屋敷の図」(通航一覧所載のもの)が、一枚そえてある。キリシタン屋敷に関するもっとも重要な文献は、

キリスト 契利斯督記 写本二冊 備後福山の藩儒・太田方が筆写したもの。宗門改奉行・井上筑後守の手控を後任の北条氏長が編んだもの。

査祇余録 写本一冊 宗門改与力・河原甚五兵衛の覚書といわれるもの。延宝二年(一六七四)正月から元禄四年(一六九二)七月まで。寛文十二年(一六七二)から延宝元年(一六七三)二月までの記事。

である。これら二つの写本について解説したのが、岡田正之の「契利斯督記考」(『史学会雑誌』第六号所収、明治23・5)である。この二篇は明治三十八年(一九〇五)『続々群書類従第十二冊 宗教部第二』に収録された。

明治期は邦人によるキリシタン屋敷の大きな研究は数えるほどしかなく、多くは諸雑誌にのった小記事である。大正期に入ると、いくつか手堅

い研究が現れる。

後藤肅堂の長編論文「小石川切支丹屋敷」(上中下)……『歴史地理』大正五年(一九一六)一月〜三月。

また単行本としては、

山本秀煌^{ひでてる}著『江戸切支丹屋敷の史蹟』(イデア書院、大正十三年「一九二四」六月。

が唯一のものである。

工藤應之 「切支丹屋敷」
三輪善之助 「江戸切支丹屋敷の現状」
(小陽)
山中共古 「吉利支丹屋敷に於る二美談」
中島利一朗 「筑前から吉利支丹屋敷へ」

これら四篇は、雑誌『武蔵野——切支丹号』(第八卷第七号)に掲載された。大正十五年「一九二六」十二月。昭和期に入って間もなく、

『東京市史稿 市街篇 第六』

が刊行された。昭和四年「一九二九」四月のことである。この中にキリシタン屋敷に関する貴重な資料が収められている(一六八〜二二八頁)。



浅利坂の遺址 川村書より。

これにつづいたのは、キリシタン屋敷の研究書として好書の評判をとった、

川村恒喜著『史蹟切支丹屋敷研究』（郷土研究社、昭和五年「一九三〇」十一月）

である。同書（全一四九頁）は、真山青果（まやませい か）（一八七八～一九四八、明治から昭和期にかけての小説家・劇作家）の『切支丹屋敷研究』（大日本雄弁会講談社、昭和二十七年「一九五二」十二月）にまさるとも劣らない、すぐれた研究である。

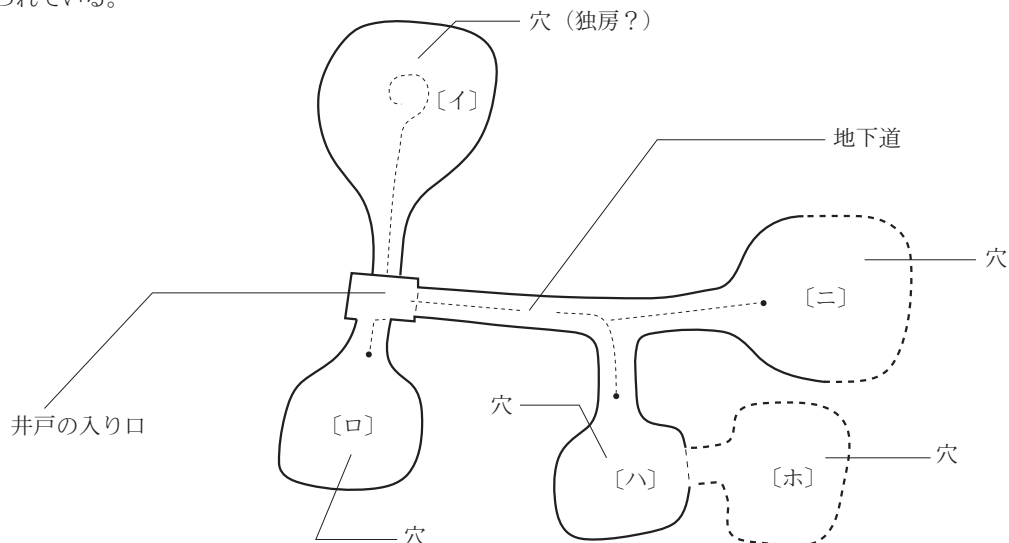
川村恒喜はひじょうな熱意と刻苦をもって研究に着手し、キリシタン屋敷跡とみなされる地をじっさい訪れ、測量したり、雑草が荒れ茂るなかで遺跡を明らかにしようとした。また明治以来のキリシタン屋敷に関する文献を読みあさり、堅実な手法で書きあげた労作である。書物のつねとして若干誤りがあるのは否めない。が、それは慎重なる考察を怠ったためという。

執筆に際して、文献主義に依ったのはよいとしても、この書の欠陥は、江戸古地図の研究をおこたった点だという（真山青果、七頁）。だからといって、本書の価値はそのことによって下るものでもない。

川村書には、各種の地図のほか、数々の珍しい写真（檀野邸内の井戸、長助とはるの墓の遺址、浅利坂の遺址、八兵衛石、移転前後の岡本三右衛門の墓、十字碑、山荘之碑）が添えられている。キリシタン屋敷の考証では、この本と真山書が決定版であろう。

戦前のキリシタン屋敷研究のなかで、外国人が書いたものとしては、まずマックス・フォン・キューエンブルク師が執筆した「キリシタン屋敷——むかし小石川にあったキリスト教徒の牢獄」（Max v. Kuenburg S. J.: *Kristianen Yasuki, das ehemalige Christengefangnis in Koishikawa*, 『日本文化誌叢』Monumenta Nipponica, vol. 1 所収, 1938, Sophia University）をあげるべきことができる。同論文を書くきっかけを与えたのは、昭和十二年（一九三七）秋——新聞報道によって、むかしキリシタン屋敷があった地区の一部が、道路建設のために犠牲になることを知ったからである。同論文は、キリシタン屋敷の地理——文献——沿革——平地と写真の解説——などについて論じている（三〇〇～三〇四頁）。

キリシタン坂の徳田哲三宅の地下で発見された「穴」(1 m50cm ~ 1 m80cm 位の大きさ。独房であったと考えられるもの)の図。シドッチ神父はそのような穴(独房?)の1つに入れられ、獄死したと考えられている。



〔注〕----- は、タシナリ師らの進路をしめす。

〔イ〕と〔ロ〕の穴は、タシナリ師が作業員の説明にもとづいて書き加えたもの。

出典：R.タシナリ師筆「シドッチ神父の最期—いくつかの新しい発見」(『モニュメンタ・ニボニカ』vol.V所収, 1942, P.249)。

ついで四年後の昭和十七年(一九四二)に現れたR・タシナリ神父が執筆した「シドッチ神父の最期—いくつかの新しい発見」

(R. Tassinari, S. S.: *The End of Padre Sidotti—Some New Discoveries*, Monumenta Nipponica, vol. V. 所収 1942, Sophia University) は、ひじょうに興味ぶかい論文である。同論文はシドッチの投獄と死、墓の跡などについて論じているのだが、キリシタン屋敷の構内には、土牢(地下牢)もあったようである。筆者に土牢発見のことを教えてくれた文献は、史家C・R・ボクサの『日本におけるキリシタンの世紀』(*The Christian Century in Japan, 1549-1650*, University of California Press, 1951, p.397, p.499)であった。

タシナリ論文は、キューエンブルク師の研究に刺激をうけて起稿したものである。シドッチ師のさいごの投獄と死—墓の跡—などについて論じている(二四六〜二五三頁)。タシナリ神父がはじめてキリシタン屋敷の遺址をおとずれたのは、昭和十五年(一九四〇)五月三十日のことであった。

同神父とその連れは、庚申坂(キリシタン坂)を下ると、まことのキリシタン坂をのぼって行った。頂上ちかくの左側に、徳田哲三宅があった。そこがタシナリ神父らの第一の目標であった。徳田宅を訪れると、厚くもてなされ、同宅のベランダからキリシタン屋敷跡を一望した。そのとき、ふと主人の徳田哲三がいった。

——土の下から、奇妙な穴がいくつも現われました。

このことは、神のお告げのように思えた。もっとくわしい話を聞こうとすると、土木作業に従事した者が呼ばれ、つぎのような話をした。

——地べたを平にしていたとき、穴がいくつか見つかりました。が、危険だと思われたので土でふさぎました。その上に家を建てることになっていましたから。ときどき穴をふさいだことがあります。坂の斜面に保存状態のよい穴がいくつか見つかりました。それは幅の狭い、坑道トネルのようなものであり、時に幅広になっておりました。それらの穴の大きさは、四、五尺（約一メートル五〇センチ）ほどのものでした。

このように語った土木作業員は、穴は正確にいくつあったか、わからない、といった。そして更にくわしい説明を求められると、穴の一つに

「四辺形の井戸」

のようなものがあったことにふれた。

その井戸らしきものの深さは、約十五尺（約四メートル五〇センチ位）。底は幅が五、六尺（二メートル五〇～一メートル八〇センチ位）、高さが三、四尺（九〇センチから一メートル二〇センチ位）ほどあり、空地に通じていたという。

同年九月十三日——タシナリ神父のもとに徳田氏から電話があり、中庭でまた穴が見つかったことを伝えた。作業員が砂地と出会い、それをシヤベルですくっていたら、幅一メートル八〇センチほどの穴の開口部が現れたという。地中で見つかった穴の状態がよかったのは、土が粘土質であったからである。

穴が発見された翌日——タシナリ神父は早速徳田宅を訪れると、深さが四メートル以上もある井戸をはしごを伝って降りて行った。井戸の底にたどり着くと、穴が三つあった。そのうちの二つは、^{〔イ〕}の穴に通じ、もう一つは地下道であり、^{〔ハ〕}^{〔ホ〕}の穴に至るものであった（さし絵を見よ）。タシナリ神父らは、四つんばいになって、まず^{〔イ〕}の穴にむかったという。^{〔イ〕}の穴の中に入ると、まっすぐ立つことができた。基底は幅広であり、卵形をしていた。周囲は七、八メートルほどもあった。

その穴は、むかしはもっと幅がせまく、四辺形をしていたはずであるが、浸食作用によっていまのような形になったものと考えられた。ついでタシナリ神父らは地下道に沿って、^{〔ハ〕}^{〔ホ〕}の穴の入口まで行くことができたが、これら三つの穴は、土でふさがれていた。

井戸のような深い縦坑は、外界との連絡口であるが、囚人は横穴式の穴（独房？）にいったん入れられると、そこから逃げ出すことはまず不可能であった。シドッチ神父は、死を迎えるまで、地下の体をひとつかろうじて入れることができる、狭い穴で、暑さや寒さ、湿気、息苦しさ、悪

臭、飢えなどにさいなまれながら生きねばならなかった。

戦後ほどなく現れたキリシタン屋敷の小研究は、三井文庫館長・中井信彦が執筆した「切支丹山屋敷について——（口絵解説）」（『史学特輯 サビエル研究』所収、三田史学会、昭和24・4）である。筆者が三井文庫に「キリシタン屋敷図」が現存することを知ったのは、古書として求めたこの雑誌を通じてであり、口絵に用いられている屋敷全体と部分（建物―獄舎）の二枚の白黒写真^{モノクロム}によってである。この絵図の製作者名や描いた年月日については明らかでないが、獄舎に収容されている人物名から、明暦三年（一六五七）以後、延宝元年（一六七三）以前の作——キリシタン屋敷が造られてから、十二、三年後のものと考えられるという（窪田明治『切支丹屋敷物語』雄山閣、昭和45・9、一四〇頁）。

このあと現れたのは、先にもふれた真山書である。そしてこの労作につづいたのは、窪田明治の一般書『切支丹屋敷物語』雄山閣、昭和45・9）である。本書はわが国のキリシタン迫害史の視点から、キリシタン屋敷ができる前後のキリシタンのこと、同屋敷のできごとなどにスポットライトをあてている。

戦後すでに六十余年になるが、ときどき好事家、史家、行楽客などが、小日向のキリシタン屋敷跡を訪ねるようである。明治末期の少年時代に——樹木うつ蒼とした、未開の地として残されていた小日向の存在を知った立正大学教授・栗原元吉は、昭和三十八年（一九六三）同大学の英文科の生徒数名とともに両三回実地調査におもむき、そのときのことを回報に発表した。こんにちキリシタン屋敷についてものを発表する人は、まれである。

あとがき

むかし古書として求めたキリシタン屋敷に関する文献に導かれ、このような小論を書くはめになったが、いままででない学説を述べるに至っていないのは遺憾とするところである。世界にも類のない「キリスト教徒用の特別な牢獄」が、江戸にあったことについて過去と現在の研究状況のあらましを知ろうとするとき、この小話が多少とも役に立つこともあろうかと思ひ、みずからを慰め、ペンをおくことにする。

さいごに小日向のシドッチ記念館館長・菅沼桜子さんから、いろいろ有益な教示をえたことを記して感謝いたします。

注

- (1) 『江戸叢書 巻の四』(名著刊行会、昭和三十九年九月)、一四七頁。
- (2) 『文京区史 巻二』(文京区役所、昭和四十三年三月)、四〇五頁。
- (3) 川村恒喜著『史蹟切支丹屋敷研究』(郷土研究社、昭和五年十一月)、五頁。
- (4) 同右、十一頁。
- (5) 窪田明治著『切支丹屋敷物語』(雄山閣出版、昭和四十五年九月)、一四一頁。
- (6) 渡辺修二郎著『内政外教衝突史』(民友社出版、明治二十九年八月)、一〇九頁。
- (7) 中山興「東京小日向切支丹坂ノ名義」(『東洋学芸雑誌』第八三号所収、明治21・8)
- (8) 同右。
- (9) 注(7)におなじ。
- (10) 注(3)の一五〇頁を参照。
- (11) 新井白石著^{策作秋坪}『西洋紀聞 天』(白石社刊行、明治十五年壬午五月)、四頁。
大槻文彦校
- (12) 同右、十二頁。
- (13) 佐藤太平著『大東京の史蹟と名所』(博文館、昭和五年三月)、一七三頁。
- (14) 三輪善之助「江戸切支丹屋敷の現状」(『武蔵野』第八卷七号所収、大正15・12)
- (15) 朝倉治彦監修『江戸城下変遷絵図集』(原書房、昭和六十一年七月)、六八頁。
- (16) 注(3)の七頁。
- (17) 注(1)の一四九頁。
- (18) 注(3)の一頁。
- (19) 注(3)の三三頁。
- (20) ^{真山青果}『切支丹屋敷研究・川柳雑記』(大日本雄弁会講談社、昭和二十七年十二月)、八九頁。
随筆選集
- (21) 同右。
- (22) 注(2)の三九九頁。
- (23) 『東京市史稿 市街篇 第六』(東京市役所、昭和四年一月)、一七九頁。